

ドコロカについての一考察

佐藤 直人

On *dokoroka* 'let alone'

SATOW, Naoto

要 旨

本稿では、ドコロカという形式は節またはゼロ・レベル範疇を等位接続する等位接続詞であることを示す。このことを示すにあたってはドコロカと前接要素の組み合わせにおけるアクセントのパターンに注目することが重要である。アクセントのパターンには前接要素がアクセントを保持する場合と失う場合があるが、前者は節の等位構造、後者はゼロ・レベル範疇の等位構造となる。このことは、アクセントを保持する場合には屈折要素、修飾要素の生起を許すのに対し、アクセントを失う場合にはこれらを許さないことから確認される。さらにアクセントを保持する場合には、従位構造では許されず、等位構造では許される等位構造縮約、右節点繰り上げが観察されることから、これが等位構造であることが確認される。

1. はじめに

本稿では(1)の下線部のようなドコロカという形式の統語的性質について考察する。

- (1) ミシェルはスペイン語を話せるどころかナヴァホ語まで話せる

本題に入る前に意味的性質について簡単に見ておこう。ドコロカは次のような形で文の解釈に寄与する。

- (2) a. ある事態から予想される事態とは全くかけ離れた事態が生じたことを表す (益岡・田窪1992, p.198)
b. “pか^pか”という問題設定の妥当性を打ち消し、実はpよりも(または、^pよりも)高段階のqであることを示す (服部2006, p.175)

つまり(1)は、「ミシェルがスペイン語を話せる(こと)」という表現を妥当ではないとして否定し、この表現が指示する事態から予想される序列¹上のはるかに上回る程度に位置づけられる「ミシェルがナヴァホ語を話せる(こと)」(例えば、ミシェルがスペイン語という外国語を話せるというだけでもすごいことだが、難しいことで有名なナヴァホ語まで話せるということが事実であったこと)が妥当であるということを示している。

ドコロカの意味論的性質からその論理表示には否定を含むと考えられるが、(3)に示されるように否定極性表現(negative polarity item)は認可しない。

- (3) *ミシェルは英語しか話せるどころかロシア語まで話せる

関連表現であるドコロデ(ハ)ナイからの類推によって、(3)は(4)のような部分構造を持つと考えられる。

- (4) ... [NP [_{InfP} [VP e NP-sika hanas-er] Inf] *dokoro*]-Neg ...

ここでドコロカが含む否定要素 Neg は否定極性表現 NP-sika をC統帥(c-command)しているが、間に節境界が介在している。一般に日本語の否定極性表現はクローズ・メイト条件(clause-mate condition)に従うとされており²、Negは遠すぎるためにNP-sikaを認可することができない。この、ドコロカにおける否定の働き方は、同様に否定極性表現を認可しない(ノ)デハナクに類似している。

- (5) *ミシェルは英語しか話せるのではなくロシア語まで話せる

つまりドコロカが持つ否定は、いわゆるメタ言語否定と同等であると考えてよい。

さて、ドコロカの統語範疇(品詞)については二つの説がある。そのうちの一つは、ドコロカには副助詞の働きを持つものと、接続助詞の働きを持つものがあるという、森田・松木(1989)に代表される説である。(6)と(7)を見てみよう。

- (6) 副助詞の働きを持つもの

ウイスキーどころか、ビールも飲みません

(森田・松木1989, p.72)

(7) 接続助詞の働きを持つもの

のどが痛くて、ご飯を食べるところか水も飲めないのです
(森田・松本1989, p.126)

(6)では、ドコロカが名詞「ウイスキー」を前接させて副詞句を構成しているように見え、それによってドコロカが副助詞の働きを持つ、と見なされる。副助詞は一般に様々な構成素に添加されるわけであるが、ドコロカも、名詞だけではなく、(8)のように副詞などにも添加可能である。

(8) 娘は家の食材を、ちょっとどころか、ごっそり持っていった

(7)では、「(誰かが) ご飯を食べる」という節にドコロカが添加されており、接続助詞の用法を持つと見なされる。もう一つは服部 (1995, 2006) の、副詞節を導く助詞とする説である。この説では述語以外の要素がドコロカに前接するケースは、その要素以外が省略されていると考える。例えば名詞や副詞にドコロカが添加された(6)や(8)のケースも述語にドコロカが添加されたものであり、そこでは(9)や(10)の下線部の「である」が省略されていると考える。

(9) ウイスキーであるどころか、ビールも飲みません

(10) 娘は家の食材を、ちょっとであるどころか、ごっそり持っていた

本稿の提案は、これら二つの説の中間的性質を持つが、後述する点で異なっている。

ところでドコロカとその前接要素のアクセントについては二つのパターンがある。(11)を見てみよう。

(11) a. ハナ[↑]ドコロカb. ハナ[↓]ドコロカ

(『明解日本語アクセント辞典第二版』 p.510)

ハナ「花」は尾高型のアクセントを持っている。これにドコロカが添加された場合、ハナは (11a) のようにそのアクセントを保持する場合と、(11b) のようにそのアクセントを失い、音韻上一語となってドコロカのアクセントが実現される場合がある。一般に平板型以外はこの二つのパターンがある (平板型にはvacuousに成り立つ)。本稿では、前接要素がアクセントをそのまま保つ (11a) のようなタイプを「アクセント保持型」、失う (11b) のようなタイプを「アクセント消失型」と呼ぶことにする。アクセント保持型とアクセント消失型については、これらが自由変異であるのかという問題がある。

本稿では、ドコロカには等位接続詞の性質があることを示し、アクセント保持型は屈折辞句 Infl (ection) P の (重文構造)、アクセント消失型はゼロ・レベル範疇の、それぞれ等位構造であると提案する。これを図式的に示したのが(12)である。

(12) a. [_{InflP} [_{InflP} ...]_{Conj} ドコロカ] [_{InflP}...]b. [_{X'} [_{X'} ...]_{Conj} ドコロカ] [_{X'}...]

2. アクセント保持型とアクセント消失型

アクセント保持型とアクセント消失型は一見自由変異のように見える。

(13) a. あの評論家は生成文法についてキ[↑]ソドコロカ「セの字」も知らないb. あの評論家は生成文法についてキ[↓]ソドコロカ「セの字」も知らない

(13a) はアクセント保持型、(13b) はアクセント消失型である。ともに、「あの評論家が生成文法について基礎を知らない」という表現を妥当ではないとして否定し、さらに極少の知識すら持ち合わせていない、ということを主張している。この両者はアクセントを除く表層連鎖が同一で、解釈も同じであると考えられる。しかし (14) のようなペアでは序列における含意の方向に関して違いが現れる³。

(14) a. *あの数学者は生成文法についてキ[↑]ソドコロカ最前線まで知っているb. あの数学者は生成文法についてキ[↓]ソドコロカ最前線まで知っている

(13)と(14)では、ドコロカに前接する表現を否定した場合に許容される序列上の含意の方向が異なっている。(14) ではドコロカで妥当性が否定されて導入される事態は、(13) とは序列において逆の方向となっている。ドコロカがもたらす序列上の含意の方向によるパターンの違いを服部 (2006) は「延伸型配置」「対極型配置」⁴と名付けているが、これに倣うと(13)は対極型配置、(14)は延伸型配置である。(14)のペアにおいて、アクセント保持型では延伸型配置が許されないが、アクセント消失型では許される。アクセント保持型及びアクセント消失型と、延伸型配置及び対極型配置の対応については明らかではない。この相関性に関する問題は今後の課題としておいておくとしても、アクセント保持型とアクセント消失型は自由変異ではないことは確かである。意味用法に関する詳細な分析については服部 (1995, 2006) を参照されたい。

アクセント保持型とアクセント消失型にはまた、以下に示す

ような統語論的な違いがある。ドコロカに前接する要素として形容動詞を取る構造を考えてみよう。

(15) この商店街は静かどころか・・・

アクセント保持型とアクセント消失型では、形容動詞の修飾要素に生起を許すかどうかに関して違いがある。(16)を見てみよう。

- (16) a. この商店街は少しシヅカドコロカ、静かすぎて気味が悪いぐらいだ
b. *この商店街は少しシヅカドコロカ、静かすぎて気味が悪いぐらいだ

(16)において程度副詞「少し」は形容動詞「静か」を修飾すること意図しているが、この解釈の下でアクセント保持型の(16a)は容認可能であるが、アクセント消失型の(16b)は容認不可能である。つまり、アクセント消失型は構造的に修飾要素の生起を許さない、と言うことができる。

さらに、連体形活用語尾の介在を許すかどうかということに関してもアクセント保持型とアクセント消失型では異なる。(17)を見てみよう。

- (17) a. この商店街はシヅカナドコロカ、気味が悪いぐらいだ
b. *この商店街はシヅカナドコロカ、気味が悪いぐらいだ

(17a)はアクセント保持型であるが、形容動詞語幹「静か」とドコロカの間に連体形活用語尾「な」の介在を許す。一方、アクセント消失型の(17b)ではそれを許さない。

以上のことは、アクセント保持型では節相当の構造がドコロカに先行し、アクセント消失型ではゼロ・レベルの範疇がドコロカに先行している、と仮定することによって理解できることである。また、服部(2006)が指摘しているように、ドコロカに先行する節相当の部分には主題が生起しない。これは、ドコロカに先行する部分は南(1974)の意味でのC段階である可能性を除外するものである。

以上から、ドコロカに先行する部分は、アクセント保持型では屈折辞句 InfP (南のB段階)、アクセント消失型ではゼロ・レベル範疇であると考えることができる。図式的に示すと(18)のようになる。

- (18) a. アクセント保持型: [InfP ...]-ドコロカ
b. アクセント消失型: [x° ...]-ドコロカ

3. 形容動詞活用語尾・コピュラ省略と等位構造

ドコロカに前接する構造は(18)のように考えることができるが、それによってドコロカの統語範疇が特定されたわけではない。ここで再度、(15)に挙げたような、アクセント保持型とアクセント消失型で表層の連鎖がアクセントを除いて同一になる場合について考えてみよう。

(19) この商店街は静かどころか・・・ (= (15))

特に連体形活用語尾に注目すると、(19)はアクセント保持型においては次の下線部が省略されたものであった。

(20) この商店街は静かなどころか・・・

このような省略は、次のような等位構造にも見られる。

- (21) この商店街は静か(で)、かつ古い街並みを残している
(22) この商店街は静か(なの)ではなく、寂れているのである

この現象は形容動詞に限らず、服部(2006)が指摘するように、名詞述語でも観察される。

- (23) あの人は平社員(な/である)どころか、多くの部下を持つ地位にある
(24) あの人は平社員(なの/であるの)ではなく、多くの部下を持つ地位にある

ここには形容動詞活用語尾とコピュラ(繫辞)の関係という問題が関与するが、ここではこの問題に立ち入らない。少なくとも言えることは、アクセント保持型では、ドコロカに前接する形容動詞活用語尾やコピュラが省略し得るということである。このような現象は(おそらく形態論的な事情によって)副詞節には見られない。

- (25) あの人は平社員(*である)から、多くの部下を持つ地位にはない
(26) あの人は平社員(*である)のに、上司に従おうとしない

もっとも、逆接解釈のナガラ節では、一見ここで問題にしているような省略と思われる現象が見られる。

(27) 彼女は子供(であり)ながら既に大学を終えている

しかしこれは節をとるナガラモと名詞をとるナガラニが省略

によって同音になったものと考えるべきであり、ここで扱っている現象とは異なる。

- (28) 彼女は子供*(であり)ながらも既に大学を終えている
 (29) 彼女は子供*(であり)ながらも既に大学を終えている

等位構造ではこのような省略の他に様々な削除が観察されるが、ドコロカを含む文でもそのような削除が観察されるかについて見てみよう。

4. 等位構造に見られる削除とドコロカ

等位構造には等位構造縮約 (conjunction reduction) や右節点繰り上げ (right node raising) などの削除 (ellipsis) が見られる⁵。ここではこのような等位構造における削除とドコロカを含む構造における削除を対照させながら、ドコロカが等位接続詞の特性を備えていることを示す。

等位構造縮約とは、(30)によって図式的に示されるように、ある等位項の対比焦点にある要素 X, Y を除いたすべてを同一性の下で削除する、という現象である。

- (30) $W_0 X Z_0 \& W_0 Y Z_0 \Rightarrow \emptyset X \emptyset \& W_0 Y Z_0$, 但し W_0, Z_0 は 0 個以上の形式素

X, Y が主語・目的語である場合、(31)のような動詞削除となる。

- (31) a. 太郎ガ花子ヲブチ, 次郎ガ夏子ヲブチ, 三郎ガ秋子ヲブッタ
 b. 太郎ガ花子ヲ \emptyset , 次郎ガ夏子ヲ \emptyset , 三郎ガ秋子ヲブッタ
 (久野1973, p.9)
 c. ... *but*_{VP}] ... *but*_{VP}] ... *but*_{VP}] Infl_{InnP}]

ここでは等位構造縮約が逆行的に作用している。第一等位項と第二等位項の動詞主要部は (31c) の表示において最終等位項の動詞主要部との同一性の下で削除される⁶。

同様の現象がドコロカを含む構造でも見られる。削除される領域と同一の形式素列を下線で示し、削除される領域を \emptyset で示す。

- (32) a. その教師は遅刻した生徒を叱ったどころか、クラスの全員を叱った
 b. その教師は遅刻した生徒を \emptyset どころか、クラスの全員を叱った⁷
 c. ... *sikar+ta*_{InnP}]ドコロカ ... *sikar+ta*_{InnP}]

(32b) では (31b) 同様に等位構造縮約が逆行的に作用している。ドコロカに前接する動詞-屈折辞複合体は (32c) の表示において文末の動詞-屈折辞複合体との同一性の下で削除される。

また、X, Y が主語・述部動詞である場合には目的語削除となる。目的語削除について、田川 (2007) は日本語では英語と異なり逆行削除によって空所 (gap) を形成することは不可能であると指摘している⁸。

- (33) a. *太郎は教科書を買ひ, 花子は教科書を借りた
 b. 太郎は教科書を買ひ, 花子は教科書を借りた⁹
 (田川2007)

これに対し副詞節による従位構造では、等位構造とは異なり逆行削除が可能であることに着目しておきたい。(34)と(35)を見てみよう。

- (34) 先輩が \emptyset 買えば, 後輩が教科書を買わなくて済む
 (35) 先輩が \emptyset 買ったので, 後輩が教科書を買わなくて済む¹⁰

(34)は条件節, (35)は理由節をそれぞれ持つ文である。(33a)とは異なり、逆行削除によって形成された空所を副詞節内に生起させている。

等位構造と従位構造における目的語削除を踏まえてドコロカについて考えてみよう。

- (36) a. *あの学生は友達に \emptyset 返すどころか勝手に教科書を自分のものにしていた
 b. あの学生は友達に教科書を返すどころか勝手に \emptyset 自分のものにしていた

(36a) は逆行削除によって形成された空所を持つが、このような構造は許されない。これに対し (36b) は順行削除によって形成された空所が許される。これは従位構造ではなく、等位構造に見られる特性である。

次に、右節点繰り上げ¹¹について見てみよう。右節点繰り上げとは、動詞句等位項の対比焦点にある要素を除いた同一形式素列のうち、非終端等位項の右端から任意の要素を括りだし、動詞句に付加するという現象である。図式的に示すと(37)のようになる。

- (37) $[X W \& Y W_{VP}] \Rightarrow [[X \& Y_{VP}] W_{VP}]$

以下の文について見てみよう。(38)は右節点繰り上げの生じていない文である。

- (38) 兄は自分の好きなひとに花束をあげたのではなく、自分の好きなひとの親友に花束をあげたのだ

この文の「名詞句-動詞-屈折辞-名詞化辞」の連続である「花束をあげたの」が右節点繰り上げによって括りだされたものが(39)である。

- (39) 兄は自分の好きなひとに_____ではなく、自分の好きなひとの親友に、花束をあげたのだ

ここで重要なことは、「あげたの」は構成素ではない、ということである。これは右節点繰り上げに見られる特徴である(日本語に関して、田川2007, 矢田部 2011)。(39)の第一等位項は(40)のような部分構造を持つ。

- (40) ... zibun-no suki-na hito-ni *hanataba-o age*_{VP}] *ta*_{InfP}] *no*_{NP}] ...

ここで {自分の好きなひとに, 花束を, あげ, た, の} は構成素であるが, {花束を, あげ, た, の} は構成素ではない。このような非構成素に見られる削除は等位構造にのみ見られる現象である。

さらに(41)と(42)の対を見てみよう。

- (41) 兄は自分の好きなひとに花束をあげたのではなく、先輩の好きなひとに花束をあげたのだ
(42) 兄は自分の_____ではなく、先輩の好きなひとに花束をあげたのだ

(42)は(41)の等位項から「好きなひとに花束をあげたの」を右節点繰り上げによって括りだしたものであるが、それに直接先行する属格要素「自分の」は「ひと」を主要部とする名詞句の中にあり、「自分の」を排除した上述の連鎖は構成素ではありえない。さらに、助詞を含むような非構成素にも右節点繰り上げによる括りだしが観察される¹²。

- (43) 太郎は先生から辞書をもらい、花子は父親から辞書をもらった (田川2007)

このように右節点繰り上げでは非構成素を対象とした括りだしが見られるのであるが、これがドコロカを含む文でも観察されることを見てみよう。(44)は(39)に対応する文である。(45)は、(44)から非構成素である「あげた」を右節点繰り上げによって括りだしたものであるが、これは等位構造の場合である(40)と同様に問題がない。

- (44) 兄は自分の好きなひとに花束をあげたところか、自分の好きなひとの親友にまで花束をあげた
(45) 兄は自分の好きなひとに_____ところか、自分の好きなひとの親友にまで花束をあげた

次に(46)と(47)のペアを見てみよう。

- (46) 兄は自分の好きなひとに花束をあげたところか、先輩の好きなひとの親友にまで花束をあげた
(47) 兄は自分の_____ところか、先輩の好きなひとの親友にまで花束をあげた

(47)では、(43)における右節点繰り上げと同様に、属格要素「自分の」を排除した領域を括りだしている。繰り返しになるが、この括りだされた領域「親友に花束をあげた」は構成素ではない¹³。

さらに(48)から(43)のような助詞までを括りだす右節点繰り上げも、(49)のように可能である。

- (48) 娘は彼氏からプレゼントをもらったところか、彼氏の父親からプレゼントをもらいまでした
(49) 娘は彼氏_____ところか、彼氏の父親からプレゼントをもらいまでした

このように、ドコロカを含む構造では等位構造でしか見られない等位構造縮約や右節点繰り上げが観察される。このことから、アクセント保持型では(50a)に示す構造を与えることができる。帰無仮説 (null hypothesis) として、アクセント消失型にも(50b)に示す等位構造を仮定する。

- (50) a. [_{InfP} [_{InfP} ...]-]_[Conj] ドコロカ [_{InfP} ...]
b. [_{X°} [_{X°} ...]-]_[Conj] ドコロカ [_{X°} ...]

5. まとめ

本稿ではドコロカには等位接続詞としての性質を持つことを見てきた。ドコロカとその前接要素からなる構成素にはアクセント保持型とアクセント消失型があるが、それぞれ屈折辞句及びゼロ・レベル範疇の等位構造を構成する。屈折辞句の等位接続であるアクセント保持型では、等位構造に見られる省略と削除の現象が見られることから本稿の提案が支持されることを見た。

注

1. この序列はマデやサエなどの取り立て詞の解釈に用いられるものとは考える。

2. 但し架橋動詞 (bridge verb) では長距離依存が許されるという観察もある。
3. 同様の観察について、齋藤・三枝・佐藤 (1999)。
4. PドコロカQにおいて、Qの指示する事態qがPの指示する事態pを大きく上回るものが延伸型、pの否定 \neg pを大きく下回るものが対極型である。
5. 等位構造に見られる削除には他に空所化がある。通常空所化は、最終等位項以外の等位項の非末端位置にある動詞が削除される現象を指すが、日本語のような動詞末尾 (verb-last) の言語では観察されないとされる (田川2007)。
6. 発音される形式である[butci]はPFへの出力後、等位構造縮約以降に母音挿入によって得られたものと考えられる。
7. 話者によってはこの文をやや不自然だと判断するかもしれない。この不自然さは分裂文の焦点項が対格を残した場合にも観察される。社長が解雇したのは部長をだ
8. 上述の動詞削除が逆行削除のみを許すことと異なっている。
9. この場合の空所は音声上空の代名詞 (empty pro) であると考えられる。太郎は教科書iを買い、花子は proi 借りた
10. 副詞節ではさらに次のようなものも可能である。
先輩が教科書を買ったので、後輩が \emptyset 買わなくて済む
11. 右節点繰り上げでは非構成素に削除が適用されるため、その理論的地位については今なお議論が定まらない。一つの考え方はPFにおいて同一性の下で削除する (deletion under identity) というものだが、次のような例はそのような考え方にとって問題となる (矢田部2011)。
次郎には本を、そして三郎には雑誌を、合計で10冊売った
12. 但し田川 (2007) の観察によると助詞によって可能なものとそうでないものがある。
13. ここで、マデは右節点繰り上げ適用後に付置変換 (attachment transformation) によって文周縁領域から転位させられるものとする。

参考文献

- 久野暲. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.
- 齋藤学・三枝優子・佐藤直人. 1999. 「ドコロカについて」, 『東アジア日本語教育・日本文化研究』 1: 195-199.
- 田川拓海. 2007. 「形態統語論における削除現象の取り扱いについて」, 第5回筑波応用言語学研究会ハンドアウト.
- 服部匡. 1995. 「『～どころか (どころではない)』等の意味用法について」, 『同志社女子大学日本語日本文学』 7: 43-59.
- 服部匡. 2006. 「『～どころか』, 『～どころではない』とその周辺の諸表現」『複合辞研究の現在』和泉書院.
- 南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』大修館書店.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版.
- 森田良行・松木正恵. 1989. 『日本語表現文型－用例中心・複合辞の意味と用法－』アルク.
- 矢田部修一. 2011. 「非構成素等位接続に関する範疇文法に基づく分析と句構造文法に基づく分析の比較」, ms. 東京大学.
- 『明解日本語アクセント辞典第二版』金田一春彦 (監) 秋永一枝 (編), 1998. 三省堂.